［自伝小説］

わが道を求めて（第九回）

記憶の彼方

長崎明
さしえ　竹内秀明

斜面のある風景

今年三月末、新潟大学を定年退職した私は、図らずも新潟県知事選挙に立候補することになった。二月一八日に最終講義と記念パーティを無事終了し、三月中に記念出版の原稿をまとめれば、三十四年にわたる大学生活と別れを告げるのを待つだけだった。最後の卒業生の卒論指導の傍ら、自分自身も四月以降の身の振り方を模索していた。心身ともにせわしないながらも退任辞令を受け取り、一息ついて二週間後の四月一三

日、療養中の君知事が突如として辞意表明、その翌日、この私が市民団体から知事選立候補の要請を受けた。その時から六月四日の投票日までの五十日間のめまぐるしさは、とても筆舌に尽くしうるものではない。

しかし、選挙運動の忙しい日程の中にあって、ふと台湾での少年時代の記憶を呼び覚まさせられる一時があった。見渡す限り真っ平な新潟平野を突っ走っている時よりも、登り降りの多い坂道を揺られる山間地帯の方が、私にとって懐しさを覚えた。特に、川の左岸に緩やかな斜面があって、緑の丘のところどころに農家が点在する風景は、幼い頃の思い出に私を誘なってくれた。

斜面は右上から左下の川原に向けて十五度ほどに傾いている。川沿いに道路と鉄道が走っているが、車も汽車も人影も見えない。人家がまばらに建ってはいるが、大きな声で呼びかけても戻ってくるのは谺（こだま）だけ。台湾の現地人の住居の中にポツリと私の家がある。

その家の中に、二十一歳の誕生日を迎えたばかりの母が、二歳の私（明）と一歳の妹（悠子）をしっかりと抱きかかえて、父の帰宅を待ち佗びている。なぜか、川沿いの道から我が家まで石の階段があって、父はコツコツと靴音を立てながら帰って来た。その時の三人の安堵に満ちた顔。

一九二三年一〇月、長男明に続いて二五年一月長女悠子をもうけた両親は、その年の五月一五日渡台、最初の任地が基隆郡四脚亭公学校であった。全校生徒十数人の公学校（台湾の子弟を教える学校）ではあったが、父にとっては自ら望んでの渡台、着任であった。しかし、乳呑子二人を抱えての母の心情、察するに余りある。この四脚亭には一年半暮らして、同じ基隆郡五堵公学校に転勤したのは一九二七年三月末日であった。

だから、この風景は私が一歳八カ月から三歳五カ月までのものである。この記憶を定かにするには両親に尋ねさえすれば良いのだが、私はあえてそれを実行していない。私の胸の中にだけ仕舞ってあるのだが、事実とそんなに掛け違ってはいない筈と信じている。私にとって、平野よりも山の中の村々の方に故郷の思いがある。崖崩れがあろうと、地辷りがあろうと、山村にいつくしみを感ずるのは、そうした心底の記憶を揺すられるからに違いない。三歳五カ月まで住んだ家の記憶が事実に即してどこまで正しいかどうか、検証するよりも、ひそやかな心の支えに留める方が賢明というべきか。

脳髄の奥底に刻された無意識の意識が、今なお私を農山村へと導くのである。

池と築山のある官舎

僅か数日の昭和元年が二年目を迎えた一九二七年三月末日、父は四脚亭公学校訓導から五堵公学校友蚋分教場主任訓導に栄転した。分教場とはいえ、その主任訓導に僅か二十四歳の乙種教員が抜擢された。公学校宿舎は五堵駅前の小高い丘の上にあった。その年の暮れ、この宿舎で二男真人が誕生した。

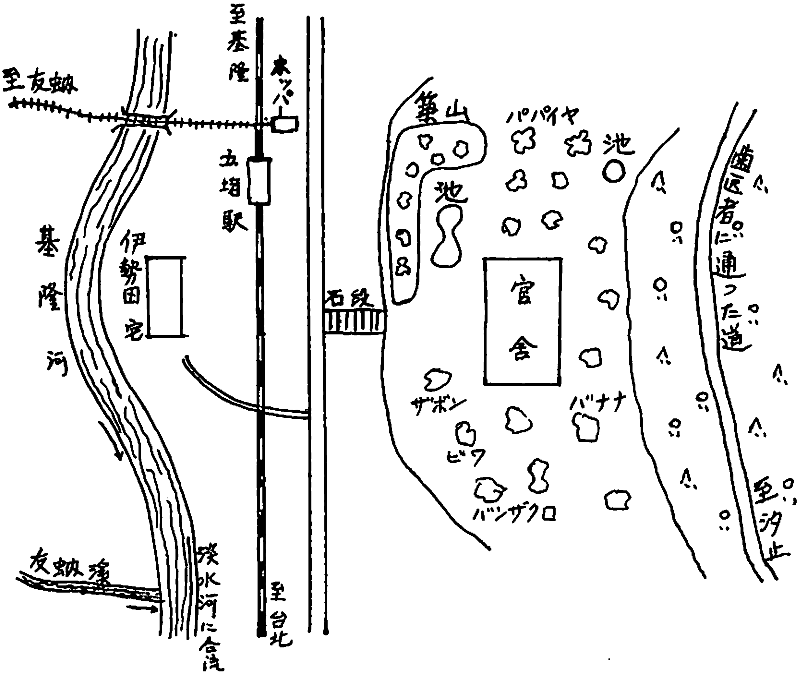
慣れない台湾生活と出産とで、母は少し健康を害したに違いない。この頃、洗濯と子守りは専ら台湾人が雇われていた。五堵にはまる二年間住んでいたし、私も四歳から五歳の間なので五堵時代のことは、四脚亭と違ってかなり鮮明に思い出すことができる。そのうえ、池と築山のある庭で一家揃って写した写真が残っている。

日本人はどこへ移住しても日本式木造住宅を建て、日本式庭園を造るものらしい。五堵の家は正面に玄関を持つ、かなり広い木造家屋だった。台湾の人達の集落は丘の下の川沿いに点在し、土で造られていた。四脚亭もそうだったに違いないが、さすがに思い起こせない。

五堵は、基隆と台北とを結ぶ幹線鉄道の駅で、近くの炭鉱から石炭を積み出すホッパーがあった。父は石炭を搬出するトロッコに乗って通勤していたが、友蚋という場所が何処にあるのか、一九八七年発行の台北周辺地図（十万分の一）で調べたが見付からない。ただ五堵近くで基隆河に合流する友蚋溪（ユズェイシー）があったが、両親はなぜか友蚋を「ユーラー」と読んでいた。国語大辞典によると蚋は「ぶと、ぶよ、ぶゆ」という意味で、「ゼイ」と音が付されているが、「ラー」とは読まないようである。両親の記憶違いかも知れない。

四脚亭でも五堵でも、その後に移転した頂双溪でも、台湾の片田舎の街では、内地人といえば、小学校、公学校の先生、役場の吏員、警察官などの役人（公務員）が大部分で、その多くは官舎住まいであった。その人数は一ケタか二ケタにすぎなかったようである。

五堵には珍しく伊勢田さんという恩給生活の年寄り夫婦が住んでいた。ああいうのを偕老同穴というに違いない。白いアゴヒゲのおじいさんと腰の曲ったおばあさんが二人きりで住んでいた。いや二人きりではな



五堵官舎付近見取図（思い出すまま）

く、ガチョウ、アヒル、ニワトリ、ネコ、イヌ、等々を家族同様に飼っていた。中でも放し飼いのガチョウは用心棒の役を勤め、訪れる人を誰彼となく、ガァガァ鳴きつつ、頭を下げて追いかけ回したので、弱虫の私には大の苦手であった。母は、私と悠子を両手に引き、真人をおぶった子守り娘を連れて、この伊勢田さんをよく訪ねたようだった。私は伊勢田さんは大好きだったが、ガチョウは大嫌いで、追いかけられる前から「ひい、ひい」と泣いた。そうすると、おじいさんが出て来て追い払ってくれた。

母は伊勢田さん夫婦を、内地にいる年寄りと慕い、伊勢田さんもまた家族同様に接して下さったので、暇さえあればお邪魔していた。そして夕方になると、

父の出迎えに台車の発着場に向かった。仕事本位の父は暗くなっての帰宅が少くなく、三人の子連れの若い母は、たそがれの一刻を待ちくたびれていたのだった。

母の仕付け

母の子供に対する仕付けは自由放任に近かったようで、それほど口やかましく小言をいわれた覚えはない。しかし、小さい時から「嘘をつくな、約束を守れ、泥棒をするな、兄弟仲良くせよ」といった類のことについては厳格に守らせられた。

五歳の私と四歳の妹とはよく喧嘩をした。私の方が身体が小さく泣き虫だったので、お菓子やおもちゃの奪い合いになると大抵私の方がめそめそと泣いた。泣きながらも執念深い私は又もや妹に手を出すと、さすがの妹も泣き出して、それにまた生まれたばかりの弟が加わって、三人の大合唱となると、母も癇癪玉を破裂させて、お灸という仕儀に相成るのだった。母はどんなに怒っても叩いたり抓(つね)ったりということはなかった。にぎりこぶしをつくらせて、人さし指の第二関節の上あたりにお灸をすえるのが常だった。それを母は癇の薬と信じていたようである。

もぐさの缶と線香が取り出されると、どんなに謝っても勘弁して貰えなかった。私達、小さな兄妹も観念して、小さなこぶしをちゃぶ台の上に揃えると、まず線香に火がつけられた。おもむろにもぐさが捻られ、いつもの関節の上に乗せられた。ここで必ず母は「もう叱られるようなこと、しないね」と念を押すのだった。「うん」、「うん」というと、もぐさのてっぺんに火がともされた。私達ももぐさの尻が予めツバでぬらしてあって、途中で消えることを知ってはいたが、ゆらゆらと煙を上げながら、火が次第に皮膚へと近ずく感触、やがて緩やかな熱を感ずるに至る数分間は、ただ涙をすすりつつ悔悟の情に浸る以外になかった。お灸の跡は僅かに赤くなる程度で、火ぶくれは勿論何の跡も残らなかった。

お仕置のもう一つは押入れに入れられることだったが、これはわれわれ兄妹にはあまり効果がなかった。臆病な私は暗い所が大嫌いで、けっこう恐がったのだが、元来おおらかな妹はすぐに眠ってしまった。押入れは大人が考えるほど居心地の悪い空間ではない。近頃の子ども、私の孫たちもそうだが、押入れを二段ベットと心得て、たまに泊りに来た時なぞ、わざわざ押入れに寝て喜んでいるくらいである。

母も押し入れがそれほど効きめがないことに気がついて、殊更に「暗い所は恐いよ。お化けが出るよ」とおどしたが、私の臆病を募らせるだけだった。

当時、ビスケットはかなり高級なお菓子だったので、十時と三時のおやつの時間に三、四枚貰えるのが楽しみだった。私と妹はこっそりとビスケットの缶をあけることを覚えたが、どういうわけか、すぐ母に見破られてしまった。そういう時のお仕置きは押入れ程度で済んだ。

五堵の宿舎の庭には、ザボン、ブンタン、パパイヤ、バンザクロ、ビワ、バナナなど果物の木が植えてあった。未熟なバンザクロはうっかり盗み食いしても、大便がかちんかちんに固まって、すぐに母に知られてしまうばかりでなく、苦しむのは自分自身であった。ある時、弟の子守り娘が、母の目を盗んで、このバンザクロを取って食べたのを見付けた私は、自分でも驚くほどの潔癖さで、幾度も幾度も「黙って取った」、「黙って取った」、「泥棒とおんなじだ」となじって、とうとうその娘を泣かせてしまった。それで気がすんだので母に告げ口もしなかったが、賢明な母は、気がついていたに違いない。子守り娘が叱られたかどうか、知らない。

その他の果物は熟す頃になると、父がもいでくれた。甘酸っぱいザボンの香りは今も懐しく思い出に残っている。パパイヤは輸送がきかないので新潟では昨今でもなかなか口に入らないが、当時、木からもぎたてのパパイヤを、それほどの貴重品とも知らず、武者振り食ったものだった。パパイヤはどういうわけか、台湾ではモッカ（木瓜か？）と呼ばれていた。

歯医者への道すがら

私達の宿舎は、基隆河沿いの「下の道」と、山裾沿いの「上の道」とに挟まれていた。「下の道」は、表玄関から十段ほどの段々を降りた所を通っていて、右に行くとすぐ駅前に出られ、左に行くと踏切りがあって伊勢田さんの家に行かれたので、ほとんど毎日のように通った。「上の道」にはやぶの中の小径を数十メートル歩かなければ出られなかった。

「上の道」に出て右折し、何百メートルか何キロメートル歩くと歯医者さんがあった。それは恐らく汐止という街だったに違いない。歯医者さんが内地人だったか、台湾人だったかは覚えていない。大きなマスクの上に眼鏡が光っているだけで、一言も言葉を交わし

たことがなかった。恐る恐る椅子に腰掛けると、やおら大きな注射針を歯ぐきに突き立て、遠慮会釈なく虫歯を抜いた。まだ四、五歳の頃だから乳歯だった筈だが、母に連れられての歯医者通いが度々あったような気がする。母自身も治療して貰ってたのかも知れない。

それ以降、還暦過ぎて歯周炎の治療を受けるまで歯医者に行かずに済んだのは、母のおかげと感謝している。しかし、歯ぐきに突きささる注射針の痛さ、口内に洩れる麻酔薬のほろにがさ、虫歯を抜かれる時のガキっという感触はいまだに忘れられない。因みに私の歯は、右下と左上の親知らずと大臼歯の三本を抜いた以外は自前の物で、入れ歯もしなくて何とか間に合っている。歯並びもそれほど悪くはないと思う。乳幼児の頃からきちんと歯をみがき、虫歯になったら歯医者に診て貰うという知識を、母は、六十年前に身につけ実行していたとは偉大という以外にない。

この歯医者への道は畑や林の中を通っていて、農耕用の水牛が良く遊んでいた。水牛は赤い布を見ると角を突き出して向かって来る、というので、母は、服装や持ち物に気を配っていた。万一、水牛が向かって来たら、すばやく右か左に体をかわすと、水牛はそのまま直進するから助かる、ということも教えてくれたが、何度か水牛に出会ったにもかかわらず、水牛の方が道をあけてくれた。乳幼児三人連れの若い母を水牛も避けてくれたのであろう。

この道のところどころに小さな泥沼があって、弱虫の筈の私がたった一人でしばしば魚取りに行った。深さはヘソくらいまでだったか。沼のへりをザルでさぐると、鮒・めだか、ゲンゴロウなどが取れた。時には沼の中で水浴中の水牛と一緒になって遊んだこともあった。沼の縁に小さな穴があって鮒の隠れ家になっていた。そこへ手を突っ込むと大きな奴が面白いようにつかまった。母は「危ないから」といって沼に行くことを禁じた。沼の中にいる私を見付けた母は、あたかも泥だらけの雑巾かのように、私の首根っ子をつかんで引き上げたのだった。

橋の上の写真

屋敷の表と裏に池があった。裏の池は丘の中腹からの湧水を溜めたもので、何の造作もしてなかった。この湧水を細い水路で導いて造ったのが表の池で、石とコンクリートで瓢箪型に造られ、そのくびれたあたりに石の橋が架けられていた。父、母、明、悠子、真人

昭和三年　於基隆郡五堵官舎

の一家五人が揃った写真で最も古いのが、この瓢箪池の橋の上のものである。バックはちょっとした築山になっていて、なかなかの豪邸の庭園に見える。バンザクロを子守り娘が取って食べたというので、しつこくなじって泣かせてしまったのも、この築山でのことであった。

写真を撮ったのは、どこから呼ばれてきたのか、プロの写真屋さんで、いまだに変色しない腕前は大したものである。当然のことながら、その頃の写真は三脚付きの写真機にかぶせた黒い布に首を突っ込んでピントを合わせ、板枠の付いた乾板を使ったに違いない。さて、シャッターを切る時になって、当時やっと満一歳になったかどうか、よちよち歩きの真人がチョロチョロして、なかなかシャッターチャンスがつかめない。何にしろ狭い橋の上なので危なくて仕方がない。母がつかまえようとするが身のこなしがきかない。

もともと、それほど気の長い方ではなかった父がたまりかねて、大声で怒鳴った途端、それまでキャッキャと騒いでいた真人が泣き出してしまった。それにつられて泣き虫の私も、悠長な悠子までもべそをかいたので、撮影はしばらくお休みとなった。一時して静かになったところを見計らって、ようやく写したのがこ

の写真である。裏面に「昭和三年、於基隆郡五堵官舎」と記されている。内地を離れて三年、それなりに落着きを見せて来た一家の近況を郷里の両親（私の祖父母）に知らせるべく、記念撮影したものであろう。父の若々しさ、たくましさに比し、母の何となくうらぶれた面影が少し気になるが、「台湾に来て良かった」との雰囲気が感じられる。我が家の宝ともいうべき写真である。

池に落ちた妹

一九八〇年五月、父母の喜寿を祝って長崎一家の歴史的な記録を編さんしようとの真人のよびかけに応じて、各自が書き送った自分史の中で、悠子は次のように記している。

昭和二年、明兄は肺炎を二度もやったり、病気がちだったとかで、妹の私はいつもおとなしく寝ていたり、ひとり遊びをしていたそうだ。親孝行のきざしはこの頃から。

昭和三年　下に弟真人が生まれ、すくすくと育ってきたら、色白で西洋人形みたいに可愛らしい顔立ちで、会う人ごとに「かわいい、かわいい、女の子だろ」と連発され、私の顔と見比べる視線を何となく嫌だなあと感じ、いじけていた。

その兄の私から見ると、この妹、そんなにいじけていなかった。病弱の私と逆に健康そのもの、性格も誠に明朗闊達。言い方を変えればやんちゃであった。その片鱗をこの写真にうかがうことができる。

私の記憶では真人がまだ母の胎内にいた頃だから、この写真の一年前ということになるが、この妹が裏の池に落ちた事件があった。とても「いつもおとなしく寝ていたり」ではなく、外を飛び回るのが大好きで、広くもない屋敷内をあっちぶらぶら、こっちぶらぶらしていた。母は口ぐせのように「裏へ行っちゃ駄目よ」と言い聞かせていたが、言われれば言われるほど行って見たくなるのが幼児の常で、食事の後片付けが終わって一息入れている母のすきをついた形で、とうとう裏の池に近づいた。母は臨月近く大きなおなかをしていたので休み休み家事を始末していたらしい。池をのぞきこんだ悠子にはきっと湧水のブクブクが目に入ったのであろう。好奇心にかられて身をのりだしたはずみに、頭からポチャンと落ちてしまった。近くにいた私が水音に驚いて駆け寄ってみると、まだ三歳の悠子がけっこう手足をばたばたさせて浮いていた。しかし、

池の縁が高くてとても手が届かない。他につかまる物もない。私には「母ちゃん、悠子が池に落ちた」と家の中にかけこむのが精一杯だった。はだしで跳び出して来た母は、あっという間に池に飛び込み、悠子を救い上げた。あの池がもしも大人の背丈が立たないほど深かったら、泳ぎのできない母はもろともに溺れていたかも知れない。たとえ泳げても臨月近いおなかでは自由がきかなかったであろう。幸い池は一メートルそこそこだったらしい。前もって池の深さを知っていた筈もない母だから、まさに命がけの咄嗟の判断だったに違いない。この写真を見ていると、この真人をみごもっていた一年前に、それだけ勇気のある行動に走らせたのは母性本能、母の愛そのものだったとしか言いようがない。

　私と手をつないでいる悠子は親思いで優しい半面、弱虫の私のボディーガードをもって自認し、双渓小学校に入学した私の手を引いて一緒に登下校してくれた。

　その悠子もいまはもういない。一九八五年四月、還暦を僅かに越えたところで、肝臓ガンのため、桜と共に散ってしまった。

（ながさき　あきら＝新潟大学名誉教授）

臨教審路線の具体化をはねかえす
教育実践・運動のあらたな展望を、
教室・学校・地域からつくりだそう

'89年地域民主教育交流研究集会

11月3日(金)～5日(日)　成田市　扇屋旅館、成毛家、若松本店

主催：地域民主教育交流研究会準備会
協賛：千葉県教育文化研究センター
千葉県民間教育研究団体連絡協議会
東葛地域民主教育交流集会実行委員会
東葛民主主義教育研究会

現地実行委員会事務局　連絡先
千葉県流山市野々下五－一〇〇四－一
安藤　弘
☎〇四七一－四五－八五八七

※会場　千葉県成田市　成田山
※足の便　①JR上野駅（常磐線）－成田駅（直通電車七〇分）
②京成電鉄上野駅－京成成田駅（スカイライナー五五分）
③JR東京駅（総武線）－成田駅（直通電車八〇分、特急六三分）
④空港利用＝成田空港に札幌、大阪、名古屋、福岡からの国内線あり
※会費　四〇〇〇～五〇〇〇円